

創立二〇周年記念特別講演

## 歴史地理学の伝統と課題

——中国地理学史よりアジア地域の課題に及ぶ——

序

米 倉 二 郎

歴史地理学会は第二〇回（昭和五二年度）大会を広島大学で開催した。この小稿は大会記念講演の草案に多少加筆したものである。

さて今年度大会のシンポジウム課題は「再び歴史地理学の本質と方法」と「村落の歴史地理」と定められていた。この小稿はこれらの課題に関連して、やや側面から卑見を述べ大方の叱正を仰がんとするものである。

課題の前者については本学会の発足に当って取りあげられたことがあり、その成果は紀要の一・二に収録されている(1)(2)。そして歴史地理学の伝統や学風についても、わが国について福井好行、ドイツについて水津一朗、フランスについて菊池一雅、谷岡武雄、イギリスについて藤岡謙二郎、アメリカについて辻田右左男の諸氏による紹介や論評が行われた。

しかしながら、わが国の歴史地理学の源流ともいふべき中国における地理学の伝統について言及されることがな

った。

もっとも東洋地理学史全般については海野一隆(3)により簡明な概観が行われ、筆者も旧著(4)(5)で関説したことがあるが欧米の地理学史に比べて紹介されることがすくないので重複の嫌いがあるが中国における地理学の伝統を尋ね、わが国における地理学殊に歴史地理学の発達への影響を明かにし、ついで斯学の当面する諸課題に及ぶこととしたい。

## 一、中国地理学の伝統とその影響

漢民族の地理的古典として重視されてきた禹貢に対して、はじめて近代地理学の立場から解説を試みたのはリヒト・ホーフエン(6)であった。そしてこれまで奇怪の書として儒家によって顧みられなかった山海経をとりあげ、これを禹貢と比較して中国における地理的認識の発展を正しく論断したのは小川琢治(7)で、中国の歴史地理の科学的研究がここに始まったということができよう。

禹貢は夏の禹王が山川原野を治めて天下を安定したという説話の形で天下を九州に分けて、それぞれの地域の特性を簡潔にのべた国家地理書ライヒスゲオグラフィであった。このように地理的知識が纏められたことは、その成立がやや下り、また優れた地理家の手になったことを思わしめる。

漢代有名な史記の著者司馬遷は、河渠書の中でその踏破した四至を示しているが、南は廬山に登り、会稽・姑蘇(今日の蘇州)に至っており、つまり現在の揚子江流域に及び、北は竜門から朔方すなわち黄河の中流部を経て蒙古高原の一部に及び、東は黄河下流域の諸支流を見、西は蜀の岷山、岷江の溪をのぞんだといい、華南を除き当時の漢民

族の勢力圏の辺境まで至っている。したがってその歴史叙述は臨場性に富み、また地域の特性について人文地理的記載を行っている。史記はヘロドタスのヒストリアとともに史書であるとともに地理書といふことができよう。

班固を長として編纂された漢書は史記の体裁を受継いたが、新に地理志という章を設けて、当時の国郡について、その戸口の統計、管内諸県名などを書き上げた。これ以後の中国の正史には地理志又は州郡志などの名で歴代の政治地理的記載が行われることとなった。

禹貢から歴代正史の地理志に至る全国の総志とともに既に漢代から隋代にかけて各地方の地志が編纂された。たとえば二世紀頃盧植が冀州風土記を著したという。隋書經籍志によれば「大業中（七世紀初）天下諸郡に詔して、その風俗物産地図を条し、尚書に上らしむ。故に隋代諸国物産土俗記一百三十一卷、区宇図志一百三十九卷、諸国図経一百卷あり」とある。

わが風土記は、大陸におけるこれらの地志を模本として編纂された。その内容体裁ともにそれに従ったものであった。大陸における地方志編纂の主目的が地方政治に資するにであったことはいうまでもないが、地方官が自己の治績を誇示するという一面もあったようである。

先の山海経と前後して水経という黄河中下流平野の河川を中心とする書物が書かれており、それが時を経て読み難くなっていたのを北魏（五世紀頃）の酈道元が注を作った。すなわち水経注で中国では禹貢と並んで永く地理学の原典とされてきた。道元は華北各州の地方官として嚴政を行う間に水経注を作ったという。

唐代海内華夷図という縮尺百五十万分の一の中国中心の大地図と古今郡国道里四夷述その他の地理書を述作した賈耽（七三〇～八〇五年）は遂に宰相ともなった。また唐の元和八年（八一三年）に奉られた元和郡県図志は同じく宰

相李吉甫の選するところであった。このように中国では政治家で地理学者が多く輩出した。わが国では時代は遙かに下るが新井白石や近藤守重などややこれに近い経歴というべきか。思うに唐宋と江戸時代末期はともに辺境に異民族の圧力が高まった時で、これに関心をもった地理家が経世の才をも振うに至ったようである。

宋代ことに南宋以降、漢民族は軍事的政治的には塞外諸民族に圧迫されて南方に偏安することを余儀なくされたが、限られた生活空間における社会経済の発展は却って著しく、地誌の内容も伝統の政治地理志の他に地域の文学などを加えて多彩なものとなった。この傾向は明清代にも受継がれた。

わが鎖国下の江戸時代も文運が復興して各藩で地誌の編纂が相継いで行われた。この際も、その初期、範としたのは大明一統志などでやはり中国地誌の影響を受継いだものであった。

中国では清末から民国にかけての国事多難な時代にも地誌の重修・新修が行われ、天下の州県で地誌の備えがない所はむしろすくないかもしれない。わが東洋文庫に架蔵される中国地志は昭和十年の目録で二五〇〇部五万巻に達している(9)。天理図書館の二四〇〇種は東洋文庫のそれと重複するものがあるが比較的最近の刊本が蒐集されている(10)。中国方志研究者朱士嘉によれば中国方志の総数は六千種十萬巻にのぼるであろうという。

中国は長い歴史を持ち、同一の場所でも時代によって、しばしばその地名を変えた場合が多い。それで史書を読むために必要な地名辞書が編纂されている。なかでも明末清初、顧祖禹が著した讀史方輿紀要はその代表といふことができよう。これはわが吉田東伍の大日本地名辞書に匹敵するものである。これらは歴史地理学を史学の俤女たらしめたものと見られ得るけれども、その沿革地理としての記述の方式は、読み方によって現在の地理の変遷史的考察として役立つ、本格的な歴史地理学の資料となり得るものである。

地志と地図とは地域認識の手段として相補う関係で編纂されてきた。中国における地図の先蹤は晋代の裴秀（二二四～二七一年）の禹貢地域図に求められる。残念ながらその図は失われているが作製の過程は晋書裴秀伝に詳しく、これは百里を一寸に縮図した百五十万分（又は百八十万分）一図であつて<sup>(11)</sup>、前述賈耽の海内華夷図などその図形を引継いだものと考えられる。このような天下の総図が編纂されるためには各州県の地図やさらに大縮尺の地方図が作製されていたことと考えられる。わが班田図はこのような大陸における測量製図の技術の伝来によって成つたものである。

以上に略説した如く中国やわが国では地理家また歴史家によつて古来多くの地誌や地図が編纂された。この他朝鮮やベトナムなど中国地理学の影響を受容したところでもほぼ同種のものが述作された。これらは歴史地理研究上貴重な資料であつて、アジアは歴史地理研究の良いフィールドであるといふことができよう。

## 二、歴史地理学の課題

さて、これから歴史地理学の当面する課題に入るのであるが、その前提として簡単な歴史地理学の本質と方法に触れることとする。一般に科学論の立場からの科学の分類は研究対象と研究方法によつて行われてきた。このような哲学的科学分類の上での地理学の地位のあいまいさはピエール・ジュールジュも歎いてるように地理学者共通の悩みである<sup>(12)</sup>。菊地利夫の近業「歴史地理学方法論」はこれらの問題に答える所の多い好著である。私見によれば地理学は地表の空間を対象とし、いわば二次元の世界に関する科学である。これに対して時間に関連して人事を考察する歴史学は一次元の科学といふことができよう。換言すれば歴史学は人間社会の事件を時間的な系列でその因果関係を明

かにするのに対し、地理学殊に人文地理学は人間社会の場所的相違をその土地との関連において究めようとするものとされ得る。しからば歴史学と地理学の境界領域を対象とする歴史地理学は実に三次元の科学といわらるべきである。この広大な境界領域について、ここまでが地理学に属し、それから先は歴史学の分野であるというような境界線を引くことは、科学分類の上からは必要であるかもしれないが、真理の探求という最終目標の達成のためにはあまり意味がないことのように思われる。

元来科学の細分化は近代科学の方向として今や行きつくところまできてしまつて、事態はこれ以上の細分化よりも科学の統合が要請される時代の転換期に差しかかっているようである。かくて三次元の世界を対象として時空にわたる人事の因果関係をさぐるうとする歴史地理学は最も時代の要請に答へ得る立場にあることを歴史地理学徒は自覚すべきであらう。

歴史地理学の既往の成果とその方法についてのヒュー・プリンス<sup>(14)</sup>の整理に従えば、第一に過去の實在の世界についての知識が挙げられる。それは歴史的事件の起きた場所の確認で古典や古旅行者などの行程などが対象とされ、欧米ではめばしい研究は終つた如くである。

しかし東洋ではリヒトホーフンが東西の交通について張騫の遠征や玄奘のインド行などを研究したことから、わが東洋史家の間に東西交渉史の研究が盛んとなった。小川琢治が周穆王の西征をはじめ多くの古地名の考証を行ったのもその機運に乗つたものであった。最近台湾の衛挺生が穆天子伝今攻<sup>(15)</sup>を出した。そしてシルク・ロードは今や歴史家地理学者といわず文学者画家などの間にもブームとなつてきたが、なお科学的検討を加える余地が残されている。保柳睦美の近業<sup>(16)</sup>はシルク・ロード地帯の自然の変遷に関する手堅い研究で盛時のシルク・ロードの考察に示唆す

る所が多い。

玄奘の大唐西域記は西域はもとより広くインド亜大陸に関する七世紀の地誌で筆者もインドベンガル平野の生成<sup>(1)</sup>を考察する上で準拠したところである。

実在した過去の復原に当って、ある時代の地理的全容の再現が企図されてきた。藤岡謙二郎による日本歴史地理総説は先史時代・原史時代・古代・中世・近世等の各時代の日本につき既往の歴史地理的研究を総括して記述されている。各時代の日本列島を大観するに便利であり、今後の研究の手引として有用であるが、研究文献の密度の相違により時代による精粗はまぬかれ難い。

実在した過去の精密な復原はある時の断面とある限られた場所においてのみ可能である。わが国で、班田図による古代のある時期、また検地帳による近世の製作された年次などについてそれが図示又記録された場所はほぼ正確に再現することができる。

さて歴史地理学は実在した過去を復原することのみで能事終るべきでない。過去から現在に至る地理の変遷を明らかにすることが他の一つの重要な任務である。適当な時間的時代の間隔で同一地域について継続的資料が存在する場合はじめて変化の方向が判明する。ホイトルセーのいわゆる系列的占拠 (Sequential occupation) である。しかし、これによって変化の原因やその力学まで説明することはできない。

あらゆる事象の空間的相互関係をあらゆる時代について明かにすることは不可能に近い。それで、個々の事象について形態の外生変遷を追及する文化景観の形態発生 (morphogenesis of cultural landscape) 的研究が行われることとなった。その中で、村落の歴史地理的研究は最も成果の挙げた分野である。これは今年度シンポジウムの今一

つの課題であるから節を改めて後述しよう。

歴史地理学的知識の第二の類型としてプリンスは過去の想像された世界 (imagined worlds of the past) を挙げている。歴史地理学が資料として利用する史料や地図などはすべて当代人の目を通して想像され知覚されたものである。したがって、我々はそれらを通して過去を理解する前にまず当代の人間とその文化を知らねばならぬ。

魏志倭人伝は三世紀頃の倭人についての中国史家陳寿（二九七年没）による述作である。そして今日の福岡辺にあたる奴国までは中国人の直接観察によっており、それより以遠は倭人からの聞きとりに基づいている。当時の倭人は金石併用時代で文化人類学的には未開文化の段階にあった。

陳寿は倭人伝の執筆に当たり、おそらく前述の裴秀の禹貢地域図を参考とし得たと考えられるが、この地図は後世の賈耽の海内華夷図などから見ても中国本土を大きく画き周辺諸民族の住地は付録的に記載されたようで東夷の中でも最も極東にある倭国は紙幅の東辺に正しい方位をとることができず南北に延長して記載されたであろう。また倭人水没捕魚の風俗などが会稽東冶など華南の諸郡に類似するところがあるのと考え合せて、陳寿は日本列島を中国本土の東辺海上に南北に長く連なるものとして記載したのであろう。

奴国までは里程で書かれ、それから先は日程を用いたのは当時の倭人の距離認識の方法に従ったわけで、これは西洋人に接触するまでのエスキモー人のそれと同じである。

邪馬台国の次に斯馬国があり、以下次は某国というように次々に二十の国名が挙げてある。これはおそらく交通線に添った序列で未開人の地名記憶の方法でもあったようである。このような考察から筆者は、これら二十カ国を瀬戸内沿岸に比定した<sup>(18)</sup>。

時代が変わると人々の思想や嗜好も移る。わが古代は中国大陸の文物の受容に専らであったが、中世に移行する過程で純日本風に改まった如きである。したがって各時代に作られた文献資料はいうまでもなく、居住様式・建造物・造園など自然環境への適応の仕方もそれぞれの時代的特色を帯びてきた筈である。

この中で、時代をこえて住民によって利用されてきた施設すなわち、文化景観は、次第に変容して今日に至っている。最近文化財の保護思想が高まり、今や個々の点的文化財にとどまらず面的に過去の町並の修景保存運動が拡まっている。そのこと自体は喜ぶべきことであるが、過去の復原には当代人の目を以てのぞむことが必要であり、その際研究者の個人的主観をできる限り排除しなければならぬ。他方宿場町や城下町の町並にしても現実にそこに生活する市民の便宜との調和をも計らねばならぬ。藤岡謙二郎の「地理学と歴史的景観」<sup>(19)</sup>はこれらの点について教えるところが少くない。一般に町並の修景保存の仕事は歴史地理学者の一つの課題となろう。

さてプリンスは歴史地理的知識の第三の類型として過去についての抽象的世界を挙げている。過去の個々の実証的研究は徒に多くの事例を提供し、行動的研究は過去の世界がどのように構想されたかについての洞察を与えはするが、いずれもそれだけでは現象の空間における位置づけ、その機能や一つの状態から他の状態への変化を説明することができない。それを可能にするのはこれら多くの事象の分類配列から生まれる秩序によってであり、理論家によって構想されてきた理論やモデルによってである。それらに就いてプリンスは多くのものを挙げているが、この小論では村落に関するものを中心に次節において述べることにする。

### 三、村落の歴史地理

文化景観の形態發生史的研究で時期を画した業績はオーグスト・マイツェンの「東西ゲルマン・ケルト・ローマ・フィン・スラブ諸民族の集落と農法」(一八九五年)であった。彼はヨーロッパ諸民族の村落が定住当初の景観を温存するものとしてその村落形態を耕地区とともに大縮尺の地籍図を利用して分析し、諸民族による村落とその農法の特徴を明らかにした。マイツェンの研究は最終目標として農法の解明を意図したものと思われるが、その研究過程で見事に村落の歴史地理を展開したものであった<sup>20)</sup>。この方法はドイツの地理学者により継承されてドイツの集落地理学の今日の隆盛をもたらした。

フランスの経済史家マルク・ブロック(一八八六—一九四四年)の「フランス農村史の基本的性格」(一九三二年)は明かにマイツェンの学統を受け継ぎフランスを中心に一層発展させた名著でフランス人文地理学者の業績も多く引用され、それとの交流において書かれた名著である<sup>21)</sup>。

マイツェンやブロックの研究は個々の村落の研究から村落と耕地にわたる多くの類型モデルを提起した。筆者はマイツェンの方法に主としてしたがって、わが国の歴史の古い村落について、その地籍図から古代条里の地割を検証したが、それから進んで条里の耕地割<sup>22)</sup>および計画的な条里村落のモデル<sup>23)</sup>を構想した。次いで古代の計画村落が中世に散村化し、その末期に集村化する形態変化のプロセスについても仮説<sup>24)</sup>を提唱した。これらはその後、地理学者・歴史学者により各地で検討され、私説の誤謬が指摘された場合が多かったけれども、すくなくとも半面教師的役割を果たしたことは筆者のひそかに喜びとするところである。

筆者はマイツェンの大著に魅せられ、アジア地域についてこの種の研究を企図したが日暮れんとして道なお遠きを歎じている。わずかに中国古代の井田と阡陌の耕地割の変遷を想定<sup>(25)</sup>したが水津一朗<sup>(26)</sup>により發展され、最近フランク・リーミン<sup>(27)</sup>によって一層拡充された。

汗牛充棟ともいふべき中国の地誌類は中国村落の歴史地理研究上貴重な資料でこれを利用して各地の村落の實在的過去たらしに現在に至る変遷が追跡研究されねばならぬ。これと同時に村落モデルや変容過程に関する仮説が構想されるべきである。アメリカの社会学者スキナーによる四川省における地方小都市とそれをめぐる村落を結ぶ都鄙モデル<sup>(28)</sup>は他地方において検証されるべきであらう。

中国とともにアジア文明の今一つの発祥地であるインドの農村についてはヨーロッパ学者による色々のモデルが提唱されてきたが最近、石田寛により歴史地理的にモデル<sup>(29)</sup>が構想された。インドは、中国に比べ文献資料の乏しい国であるが過去三百年に及ぶイギリス支配時代に各県の地誌 (Gazetteer) が編纂され、各郡に土地台帳・徴税原簿などが編纂されている。これらを活用した村落の歴史地理的研究もインド地理学界の主要なテーマの一つとして發展しつつある。

村落の研究は村落の中心に形成されまたその対立社会とも見做される都市に拡大されてきた。ことに二十世紀の進行とともに世界の都市化が進展して都市の研究が集落地理研究の主流をなすに至った。さりながら今や都市は過密化し、農村は過疎化してともに旧来の共同社会は崩壊に瀕している。かくて新しいコミュニティの形成とそれを基礎として都市と農村を一体化した広域生活圏の画定が要請されるようになった。これに答える為には既存集落の歴史地理的研究を出発点とした新たな構想が必要であらう。

最後に、地上における生活圏の纏りの頂点に諸民族の生活空間が存在する。諸国家の領土もこれを基礎として成立している。その消長は政治地理的歴史地理的研究に俟つところである。差当り隣接民族間の生活空間の競合がある場合その調整がなされねばならぬ。その妥当な線引はまた歴史地理学者の任務であらう。

## 注

- (1) 日本歴史地理学研究会 歴史地理学紀要一 一九五九年
- (2) 日本歴史地理学研究会 歴史地理学紀要二 一九六〇年
- (3) 野間三郎編著 地理学の歴史と方法 昭和三四年 十三—十九頁
- (4) 米倉二郎 東亜地政学序説 昭和十六年
- (5) 米倉二郎 東亜の集落 昭和三五年
- (6) Richthofen, F. von (1876) China, I. pp. 277—364
- (7) 小川琢治 支那歴史地理研究・同続集 昭和三・四年
- (8) 森 鹿三 鄺道元略伝 東洋学研究所収 昭和四五年 一九九—二〇九頁
- (9) 東洋文庫 東洋文庫地方志目録 昭和十年
- (10) 天理図書館 中文地誌目録 昭和三十年
- (11) 森 鹿三 裴秀禹貢地域図のスケールについて 前掲書所収 二六九頁
- (12) George, P. (1976) Difficultes et incertitudes de la géographie. Ann. de géographie LXXXV.
- (13) 菊地利夫 歴史地理学方法論 昭和五二年
- (14) Prince, H.C. (1971) Three realms of historical geography Progress in Geographie vol. 3. pp. 4~86
- (15) 筒徒 生 穆天子伝今攻 三卷 一九七〇年
- (16) 保柳睦美 シルク・ロード地帯の自然の変遷 一九七六年

- (17) 米倉二郎 ベンガル平野の生成と開発 広島大学文学部紀要 三〇巻 一九七一年
- (18) 米倉二郎 魏志倭人伝に見ゆる斯馬国以下の比定 史学研究 五二 昭和二八年
- (19) 藤岡謙二郎 地理学と歴史的景観 昭和五二年
- (20) Meitzen, A. (1895) Siedlung und Agrarwesen der Westgermanen und Ostgermanen, der Kelten, Romer, Finnen und Slaven, Bde. 1.
- (21) Bloch, M. (1931) Les caractères originaux de l'histoire rurale Française.  
河野・飯沼訳 フランス農村史の基本的性格 昭和三四年
- (22) 米倉二郎 農村計画としての条里制 地理論叢 一輯 昭和七年 前掲 東亜の集落所収
- (23) 米倉二郎 律令時代初期の村落—三十戸一里について—地理論叢 二輯 昭和八年
- (24) 米倉二郎 中世村落の様相 地理論叢 八輯 昭和十一年
- (25) 米倉二郎 東亜における方格状地割の展開 前掲 東亜の集落所収
- (26) 水津一朗 古代華北の方格地割 地理学評論 三六ノ一、社会集団の生活空間 部分所収 昭和四四年
- (27) Leeming, F. A. (1976) The Chun-T'ien Landreape. Working Paper No. 151, Univ. of Leeds.
- (28) Skinner, G. W. (1964・1965) Marketing and Social Structure in Rural china The Journal of Asian Studies, Vol. 24
- (29) 米倉二郎編著 インド集落の変貌 昭和四八年  
Ishida, H. (1972) Cultural Geography of the great Plains of India.